



13
2257
4



繪本烈戰功記卷之四

目錄

武田勝頼伊奈郡代之事

長沼長八郎之傳

昔柳押之介討長沼長右衛門圖

小幡信定之事

信定去戰場圖

信定主後遭長沼兄弟事

長沼兄弟獲足於甲及事

川越功記卷之四

信定夫婦邂逅近管見之圖
信友追長沼之跡事



繪本烈戦功記卷之四

武田勝頼伊奈郡代之事

武田晴信入道信玄の四男四郎勝頼と云々其母ハ紙坊仔左二郎の
主なり故郷信濃守頼茂が女なり信玄乃妻と成て勝頼
を生りまよりして信玄ハ勝頼孤をせしむ事大なる方
是より依て故郷信濃が名跡を継ぎ信及仔左の跡代定
り武功の者とありし所屬一守遠の城主と為ん中兼頼
るるも中も嫡子太郎義信が四郎人信も母何なりと
さるる先般富岳約少捕長坂長保新跡部大炊介の二士
太郎義信の方へは向而勝頼事信及仔左が由強もあれ
そ名跡とつゞせしむる因りは信及向後仔左乃跡代と



釣

77

川口氏カ巴卷之四

安部小原秋山等を削る言をの傳へ指を以りて中送られ
 する。二使具は信長に及ばず。義信は分聞し、怒りしを模
 我嫡子たりと雖、四郎は學考する事と兼、心は除どわらざる
 般武功の者、許多流し。信長が代は、
 有るや、
 乃作あれが義信は、
 中此は、
 改く、
 即左衛門尉小原下總同丹波秋山紀信、跡跡右衛門尉向出雲
 小田切孫右衛門。竹内与み左衛門の八人と流して言をの傳へ
 られる。是よりして信長四郎勝頼と稱く、威勢一國を克これ義信の

長沼長八郎之傳

上は信長寺には、
 源六兵衛村取勇猛と顯く。長沼長八郎定幸が由緒
 信及末武田家は、
 文土年、
 共系野を、
 係を

川内カ...

斬 幸次母を至人庵光寺にも。骨の振るはれ有り。
程 舟の共るり。兄柳を助ふる。水かけよと。境の下の法
田より居る。口の者。水と汲せり。甲及の長沼と
右衛門。幸次。水と汲せり。傳八とくる。柳者と召連く。
是ける。青柳他五者。とてけき。馬柄抄。はらひ。水の水
以長沼。後より。ぐんぐん。あひせり。傳八即ち怒り。何
者あれ。往來。狼籍。不釈。ある。柳は。比を。青柳
呵々と笑ひ。柳等。眼を。人より。依。青柳。柳。か。前と
絨。お。は。又。一。ひの水頭
お。長沼。右衛門。あれ。大。情。徳を
有柳柳を助。暴名。及。然。斬。程の程入

とら。心。柳路傍。辰。予。を。
と。け。ま。取。も。幸。及。路。の。外。の。法。
柳。を。み。ぐ。半。柳。強。憐。は。癖。と。武。士。の。道。と。
籍。あ。ら。う。を。奇。怪。な。れ。甲。及。の。長。沼。長。左。衛。門。と。
事。て。罪。を。焼。よ。と。確。と。眼。を。辱。し。め。られ。な。
如。氣。烈。火。の。如。く。突。你。に。賢。も。力。未。に。及。ぐ。ん。
助。命。と。乞。ひ。然。あ。ら。う。一。蹄。又。蹴。殺。す。も。ん。け。須。軍。
又。保。る。不。能。あ。ら。う。み。得。れ。れ。と。
境。又。飛。あ。ら。う。て。長。沼。有。り。け。
さ。ふ。が。長。左。衛。門。飛。も。の。
と。柳。者。傳。八。尾。筒。解。力。又。ま。い。り。
相。生。

好 佐

引例せむ。その青柳の上よたきう。代去運程も。後と。中よ。及て。その。と。立。増。き。下。良。が。仕。業。非。と。太。刀。抜。け。て。長。沼。王。後。よ。切。て。長。右。衛。門。も。抜。合。せ。て。切。結。ぶ。侍。八。郎。の。後。よ。切。身。ま。ど。柳。も。か。も。せ。た。右。よ。付。た。ま。ら。火。光。と。ち。り。と。切。合。せ。り。長。沼。の。名。取。わ。り。叙。祿。の。達。人。取。り。け。れ。た。遠。る。も。た。た。み。け。く。切。ぬ。べ。別。當。五。双。の。柳。も。か。も。こ。の。雨。の。名。取。負。こ。も。あ。く。え。く。る。雨。へ。青。柳。が。る。の。に。取。先。ま。ま。く。を。糸。の。備。士。ま。け。内。取。告。け。る。より。同。し。強。暴。の。者。も。聞。や。い。お。進。く。強。討。中。も。柳。之。介。が。身。縁。も。か。後。身。保。身。源。太。子。を。放。ち。長。沼。よ。切。て。か。る。そ。外。別。兵。十。六。騎。長。沼。と。追。五。圍。四。方。より。切。射。る。切。先。も。石。火。の。如。く。長。沼。も。今。の。切。死。と。い。ひ。定。め。精。心。日。は。十。倍。と。太。刀。と。雷。光。の。如。

は

あり。八。方。よ。尚。く。戦。へ。ど。も。死。生。あ。ら。び。の。者。者。も。未。小。成。も。退。守。下。良。の。礫。石。も。砂。と。霧。青。柳。一。統。ハ。五。二。五。二。よ。切。こ。む。ま。ど。悍。者。侍。ハ。九。ヶ。如。の。き。川。は。け。く。保。身。源。太。子。一。刀。よ。服。脈。難。ま。と。殺。死。ふ。と。長。沼。ハ。何。卒。し。ま。暴。悪。の。柳。之。介。と。黄。泉。よ。引。連。ん。と。霧。よ。あ。ま。く。傷。け。た。小。石。の。礫。眼。よ。入。敷。テ。雨。の。痛。子。ま。た。ど。ろ。れ。侍。遠。よ。青。柳。柳。之。介。が。赤。心。太。刀。と。交。り。し。て。出。向。保。身。切。射。ら。れ。眼。も。ん。ぞ。傷。得。ま。ふ。有。柳。も。介。憤。激。一。声。し。て。長。右。衛。門。の。肩。先。よ。ま。り。拍。こ。と。う。ち。て。斬。下。り。柳。之。介。も。み。ヶ。新。縁。と。か。い。二。ヶ。雨。の。名。取。負。そ。外。尾。も。守。子。と。あ。ま。り。の。七。人。き。れ。ど。も。長。沼。王。後。有。服。の。帯。く。切。休。ま。れ。ば。柳。



吉柳押之助



青柳押之助
 長沼長左門
 討つ
 図

借八

長沼長左門

心居りてとて負河按ふ抱しく朱又成てぞ取まける
 甲長沼が家こへ長右衛門田を借ても信及よりぬ
 ざりちれば人預出しく尋させらるる信及は神の旨御
 押し助がみまは後にもよ付きし類事委せえけし
 子門の歌ふ人んは物あく長右衛門が書の上段の春まて小懐
 の家又仕後長沼は越してう二人の男をせ候と長女と
 今年七才とて八郎とて又父の付きしとて
 母の膝より泣きて只さあしくははちも前後ま
 ちらぶ。おと果ドと心と先連し何卒とて兄弟のふ
 青柳を付らんものと作はれり佛は林の歌の中は兄弟
 成人をすのすみ娘どあられあるかくて光陰は園守おく

愈い

車コ

天文十四年の天と逢へ長助は十才長八郎は八才と成る
 されば母の懐よりてそをぬ列取置り父と付きし
 此急骨髄よらみ候初は托もあは本刀と取て
 為す極大の事は無そりちらぶ一日兄弟は母の傍に
 かく信及は立辨能く青柳を付く父の靈魂を
 ん事河類ひけり母の候とらしくと流し
 子と有ぞやまご年とも終ぬ身と能も心
 どのうを今うは事と述らる共舌く
 き人の天晴けちぢよは付くふ物なり
 の曲者ちん中くは付事思ひも
 なるも茲て後武州も達してまを出立あま母が故里に

只茂カ記卷之四

信定は守業政病死して。其子今の信定守業重と。信定は長野と。信定は
 付取進んで。一ヤ。密に義倫へ送る。長野早速
 小同着。信定が弟國士。今召招て。謀計を示し。合せ
 其維徳が。尾張守信定。其子。今召招て。謀計を示し。合せ
 以も。尾張守信定。其子。今召招て。謀計を示し。合せ
 今召招て。謀計を示し。合せ
 串れ。長野業重。八百餘騎。引率て。中徳に奉じ。城へ
 長野信定守。遠眼。合上。合。押寄し。受
 夜中に。不意に。何程の。率。あ。蹴
 くる。病。若。厚。代。の。遣。取。

信定は守業政病死して。其子今の信定守業重と。信定は長野と。信定は
 付取進んで。一ヤ。密に義倫へ送る。長野早速
 小同着。信定が弟國士。今召招て。謀計を示し。合せ
 其維徳が。尾張守信定。其子。今召招て。謀計を示し。合せ
 以も。尾張守信定。其子。今召招て。謀計を示し。合せ
 今召招て。謀計を示し。合せ
 串れ。長野業重。八百餘騎。引率て。中徳に奉じ。城へ
 長野信定守。遠眼。合上。合。押寄し。受
 夜中に。不意に。何程の。率。あ。蹴
 くる。病。若。厚。代。の。遣。取。

源朝野記卷三四



信定
戰場を
去る



浅田大平

死闘の物語

交ふ。千由縁の今、連うの速きい。鬼有ふ心なき。別れ
 中、遠し。ゆんことふと。信まては威し。何れは是者も也
 約先一里の昔中なる山林にて我らも。行り。佐の。重の
 こん。し。是東道とて。河内太平は向ひ。佐長途といひ。佐
 又。方。行。ゆ。じ。遠。事。ふ。れ。至。孝。感。る。は。堪。げ。お。き。く。不
 便。又。と。之。が。替。山。溪。の。守。し。て。裁。方。の。別。れ。路。近。道。を。行
 登。し。平。今。依。傍。又。落。着。て。待。せ。れ。ど。と。命。と。ん。る。太。平
 畏。て。お。個。の。事。ふ。と。い。ふ。は。た。の。と。味。し。え。は。付。ひ。約。事。ふ。の
 佐。定。ま。婦。よ。厚。く。謝。し。て。河。内。は。侍。て。別。れ。去。ぬ。佐。定。主。後
 事。は。別。れ。お。ど。く。休。み。越。し。る。事。一。里。余。あり。て。妻。中。の。侍。戻。よ
 御。音。き。ま。の。時。又。左。の。侍。は。四。十。二。と。な。れ。女。の。い。う。ふ。事。よ。致

僕

か。ま。む。む。む。家。丁。と。い。ゆ。る。が。二。人。附。し。て。い。し。く。り。か。抱。き
 こと。小。幡。主。後。又。不。所。ひ。つ。と。お。き。能。く。事。ふ。事。ふ。ら。ん。や
 して。約。信。定。が。妻。の。年。は。く。ま。ひ。つ。る。管。見。と。野。本。ま。は。八。か
 ら。八。伯。母。あり。ら。甚。八。早。も。声。を。う。け。い。う。は。伯。母。の。前。上。り。れ
 乃。野。本。ま。は。八。と。侍。し。ど。是。は。主。君。小。幡。屋。内。婦。も。日。々。せ
 の。つ。り。し。い。ふ。女。い。お。登。り。て。是。い。つ。う。や。婿。屋。に。置。く。は。主。君
 の。日。の。ま。の。い。う。あ。る。事。事。是。い。つ。う。と。將。致。も。上。り。た。い。あ。る。ま
 う。こ。を。う。り。は。事。教。に。佐。定。ま。婦。も。侍。く。久。し。死。對。面。と。お。し。と
 候。ひ。或。う。款。き。國。主。も。か。致。送。と。ま。と。中。う。み。親。御。居。候。い。つ。う。に
 新。路。ま。致。し。ま。し。む。や。ら。ん。中。に。佐。定。ま。婦。も。侍。候。ま。長。お
 清。門。信。見。と。お。し。く。青。柳。柳。し。か。が。み。又。侍。を。置。き。子。見。知

人

信定 夫婦
菅見 小
邂逅 小
の づ
園



形く勵せられ。兄の者も。常將の明を。心は。保肝は。後。精練
 刑苦而勉学ける。流石は。名も。小膳。佐定。今。流治。又。執居。其
 授事。囊中の。雅の。如。例。は。頭。され。述。隣。又。在。武。田。の。被。官。其
 其。名。成。其。い。し。中。武。勇。を。感。而。ぬ。と。者。曰。益。進。く。我。気
 草。後。又。充。常。後。乃。場。は。益。を。中。つ。ら。管。範。乃。交。友。結。も。有
 て。い。し。を。は。し。く。ど。あり。る。と。い。ふ。は。ど。よ。い。と。來。冬。と。い。れ。く
 天文二十二年の。青。陽。乃。途。く。長。助。を。十八。七。長。八。郎。を
 十六。七。と。ど。ち。り。ある。名。も。小。膳。佐。定。を。業。る。が。小
 兄。才。の。一。心。練。磨。の。功。も。も。名。は。拙。く。其。樹。乃。乃。ふ。い。し。り
 され。佐。定。佐。亮。の。形。は。中。年。加。冠。して。兄。と。長。助。定
 房。弟。と。長。八。郎。定。幸。と。名。の。せ。る。今。ら。あ。人。佐。武。術。も

敵

拔群を。れ。い。急。ぎ。信。乃。は。立。越。故。青。柳。を。付。く。又。の。靈。魂。出
 其。も。む。じ。敵。も。座。光。寺。の。覚。海。き。者。を。れ。を。定。而。助。太。力
 夥。有。べ。れ。せ。て。佐。定。より。浅。田。太。平。野。本。甚。八。の。あ。士。と。副。官
 され。心。長。保。子。厚。恩。以。拜。謝。一。願。く。母。一。族。又。い。し。と。告
 門。出。の。益。取。り。て。常。進。を。發。足。する。此。事。も。亦。も。亦。く。し
 され。ひ。ま。が。佐。若。子。を。孝。と。あり。れ。と。威。せ。る。ふ。か。た。く。あ。を。い
 兄。弟。背。尾。より。能。云。た。付。あ。り。せ。其。中。友。國。は。ぬ。と。い。し。其
 も。其。双。の。割。當。と。い。し。け。た。此。侍。貞。如何。の。あ。し。と。其。又。隣。里
 郷。黨。も。よ。も。い。し。守。他。困。え。付。く。同。者。也。も。肩。唾。と。飲。て。後。の。時
 相。を。付。か。り。親
 信。友。追。長。沼。之。跡。事

敵 詔

新而長沼同胞ハ野本信田と依又旧里ヲ發受。先武田の八
播宮へ信神前ノ拜而千石母の妾事ヲ行わぐて縁役を
取申す。今般教青柳と対りしは放りしとて再甲瓦の地
を踏いほすと。作文何紙も。四人同執紙とて。盟約終て
一紙ヲ封じ。夜の磐枝ニ結付く。再拜して退る。爰
石田長義。矢ヶ崎共九郎とて。義一軍の差者あり。後よ
田太郎義信の家居らる。近曾小幡の門は。屢今迄信
通く。兵法と學が同。長沼兄弟と此の交と信らる。故に
家と申しく。義氣を。み孝子の復讐云。此時も餘
よなき。平生の信義も。去來や心よ。人程ハ。一騎の力と信
んごと。お人息と。うら。追討。る。遂。國。入。り。て。追

報 底

付心登河船。助太力せん事と。ちられ。兄弟も。平生の
言ふ遠く。信と感。て。固辭せ。改
改而助太力と。候と。志。野本信田も。後
二信友の情と感賞。と。六人とも。信。路。と。多
宣。又。故。長。沼。長。右。衛。門。が。甥。と。飯。室。本。義。治。城。源。八。郎。と。い。ふ
者。初。而。又。難。を。と。叔。父。長。右。衛。門。引。取。ま。さ。れ。如。養。育。
成長の後。源八が。母。の。伯。母。に。た。り。武。田。太。郎。義。信。の。言。と。不
叶。並。々。と。い。は。長。沼。兄。弟。復。讐。云。と。出。て。聞。て。飯。室。本。義。
急。ぎ。増。城。方。と。あ。り。て。承。く。叔。父。長。右。衛。門。の。恩。を。承。り。本。實
太。郎。の。事。を。今。又。兄。弟。の。者。未。北。も。足。ば。しく。復。讐。云。と。
臣。と。言。ぬ。國人。と。い。は。名。に。是。則。當。の。青。柳。殊。云。門。を。

大

果末
入敵

助太刀將大勢有ちれど長沼兄弟いふは働も仕換も
必定あらんまの余知しえ聞ひあふふ実のむらさき
疾速射す助太刀と進められたる源八も在りて互不
准候そくくはして是も兄弟が跡とあつてまきまき
鹿とつりて追射増味源八進で己が武勇と後助太刀
と望みれば長沼兄弟つらふといひけん因縁と曰法志の程は世々
悉次ありてさうゆがう敵の二門も夥助太刀もあつて有べく
あつて射あつていふ事い成づく先射死と覚悟究ては万亦武運
よ射ひ射あつて事有ともそ件あぬ人のうち敵のあつて
死あつてあつて追取切し然れば年頃あつて射あつて
甲斐もあつては原志の程は意は深て射るふ云世も及んだ

果末

且是追跡が追ひしこと亡父への義も立は候と見え得
今の何卒射替へぬりあつては是れも是れもぬりあつては
復讐の先止り中じと思ひ切てあつては飯室本氣懐中
起伸文の中そ件は折又評めも有つては是れは紙
忽圓と出する今の件は折も有とも一旦助太刀射ると心を
変へて形は追射さうとさうく飯國に催し面合さんやそ上我
射死さうと追取まらんぞと言さうあつてはあ人の用は是れも
なく敵も射替へらる只一刀又切らるる事有故ま程速は甲斐
あつて者と見え下られよといふも助太刀得ん有候とされは只
今兩人は遠く中道と増城と差向ひて己は柄もあつては
長沼兄弟石田夫々勝孫本は旧も中より押あつて長沼

急ぎ兩人が糸いとを子こに成なりて見みえし程ほどにていいたたむむすすて思おもひひののららるる志こころざしと
いいふふとああららむむ事こと一ひと中なかにに成なりりや。何なに卒つひ助たす大おほ刀やいば程ほどにに成なりりて
程ほどにに成なりりて。友人とも心こころをを成なして終しまは八やち人心こころ成な一致いつちにに成なりりて。垣かき尾びののああららりりは
容ゆる舎やをを成なりりて。ああののいいはは立た出でるる。故ゆゑ青あお柳やなぎ之のかからら他ほかにに出でるる。
近ちかくくいいふふ事ことは。清きよ 附つ近ちか

二
あ
ら
む
事
一
中
に
成
り
や

繪本烈戦功記卷之四畢

